

古書喫茶のお姉さんは、閉店後だけ頁をめくる手を止める――灯りを落とした書架の奥で、年上の店主が女に還る夜――

いつも本を読んでいる物静かな古書喫茶の店主が、通い詰める年下の前でだけ、葉を挟んで顔を上げる静かな純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

久瀬葉月は、いつも何かを読んでいる人だった。

古書喫茶〈頁〉のカウンターの内側で、客の途切れた時間も、注文を待つわずかな間も、彼女の指はいつも本の頁を繰っている。常連の誰もが、その横顔を「絵になるねえ」と言った。物静かで、聡明で、自分のことは何ひとつ語らない、品のいい年上の店主。

——その人が今、灯りを落とした書架の奥で、俺の腕のなかに抱かれて、頁をめくる手を止めている。

閉店後の店は、いちばん奥の読書灯ひとつだけが、ぼんやりと点っていた。天井まで届く古い書棚が、夜のなかに黒い影の列をつくっている。表のシャッターはもう下りて、紙とインクと、かすかな珈琲の匂いだけが、この狭い空間に満ちていた。

昼間の葉月を思う。常連の老人に淹れたての一杯を出し、調べ物に來た学生にそっと棚を教え、誰に対しても穏やかで、けれど決して自分の内側へは一步も入れない、あの静かな微笑み。栞を挟むみたいに、いつも人との間に、薄い一枚をはさんでいる人。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、読みさしの一行みたいにとぎれとぎれに呼んでいる。

「……学、まなぶくん」

開いたままの本が、椅子の肘掛けから滑って、ぱたりと床に伏せて落ちた。彼女はもう、それを拾おうとはしなかった。いつもうなじでまとめている黒髪はほどけ、白い首筋に幾筋もこぼれている。読むときだけかける銀縁の眼鏡は、とうにテーブルの隅へ外されていた。伏し目がちの理知的な瞳は熱に潤んで、昼間の涼やかさはどこにもない。

俺だけが知っている。この人の、頁を繰る昼の顔と、葉を挟んで顔を上げる夜の顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——